士藏康熙刪修本とこの三書を併せて、各書に記されて居る滿洲人名地名の譯字をみるに、最初の一二葉の中に於てさへ次のやうな異同を擧示する事が出來るのである。今、武皇帝奪兒哈奇實錄を(1)、滿洲實錄を(2)、康熙本太祖實錄を(3)、努爾哈赤癸錄を(4)として數個の例を擧げる事にする。

(1)	(2)	(3)	(4)
鰲莫惠	鄂謨輝	俄漠惠	俄漠惠
鰲朶里	鄂多理	俄朶里	俄朶里
黑禿阿喇	赫圖阿拉	黑圖阿喇	赫圖阿喇
除烟	褚宴	褚燕	褚宴
拖落	安羅	安羅	安羅
胍一莫	安一謀	安議謨	安義謨
石報奇	錫寶齊篇古	錫寶齊篇古	錫寶齊篇古
范喍	樊察	范察	范察

右の例で知る如く(1)は譯字最も古臭を帶びて居り、(2)之に次ぎ(3)(4)は略同じで譯字が整頓されたと云つて差支ない。又肇祖及び興祖を記すにも、(1)では都督孟特木と都督とし、(2)では都督孟特穆と都督福滿とし、(3)では肇祖原皇帝諱都督孟特穆と興祖直皇帝諱都督福滿とするに對して、(4)では單に肇祖原皇帝と興祖直皇帝とするのみで諱を略して居る如きも、亦その時代の前後に本く書法の變化を認め得ると思ふ。其他かゝる例は枚擧に遑ない所で、その內容の具體的事實に就いても同樣で、かの太祖歿後の事件としてやかましい吳喇國大福金の殉死の件に就ても(1)(2)(3)には凡て太宗等が强要した事を明記して居るに反し(4)には單に以身殉と記すのみで詳しい事情を述べて居らぬのも、乾隆改修の如何なるかを察知するに足ると思ふ。かゝる次第であるから史料としては前の三者の價値の大なるを認むべく、その中でも(1)が特殊の價値ありて他の二つ之に繼ぎ、(4)は整理されただけ價値は減ずるかと思ふのであるが、無論參照はしなければならないと考へる。然し要するにその間の價値には異同ありとは云へ、かゝる幾種類のものを集めて比較考證の上淸初の歷史の探究に當る事を得るに至つた事は、この方面の研究に携はるものとして衷心喜びに堪へぬ所であつて、此にかゝる史料文獻の印行を視すると共に今後この方面の研究の一層進まん事を學徒として切に祈つて止まぬ次第である。(京都栗文堂取次販賣。詳くは同店に問ひ合せの事)〔以上、鷲淵〕

●日本資本主義發達史講座

明治維新に關する歷史的考察は、今日その數實に夥しいけれども、質に於て尙遺憾なきを得ない。殊に幕末より維新政府樹立に至る歷史事實の分析に於て國內的事情に目を奪はれ偶々對外關係を取扱ふ場合あるも、これを世界資本主義發展の一環として理解せざる場合が多かつた。換言するならば維新政府の樹立を、日本史の過去に關係せしむるに努め、これをその將來、卽ち現代社會に關聯して解せざる難點があつた。

最近に至りこれ等の缺陷を補ふに足る論作相次いで發表せら

るゝに至つたことは現代史研究上喜ばしい傾向であるが、今回大塚金之助、平野義太郎、野呂榮太郎、山田盛太郎の四氏編輯の下に生れ出た「日本資本主義發達史講座」の如きは就中白眉として期待せしめるものである。同講座は明治維新の成立とそれが新展開を講じ現代社會に於ける政治的若くは經濟的情勢の不安の根本的解決に資せんとするもので、第一部明治維新史、第二部資本主義發達史、第三部帝國主義日本の現狀、第四部日本資本主義發達史資料解說の四部門に分ち論ぜられてゐる。各部門の細目に就いてその內容を推察するに社會經濟狀態、階級關係、政治的支配關係、世界狀勢、思想的動向等、從前漠然と取扱はれたに過ぎなかつたところを精緻に分析批判し、過去に關係してこれをとくは勿論、未來への發達の契機を把捉するにも充分の考慮がはらはれてゐるかに見える。

又第四部に資料解說を說みんとせることに依つて、本講座が煽動的意圖の下に企てられたのではなく、正確なる資料に基いて眞相を簡明せんとするものであると見られる。未だ第一分册を手にしたのみでかゝる企圖が如何なる程度に滿たされてゐるかは知り得ないが、而も今迄の所或程度期待の裏切られざるを思ふ。

講師の顏ぶれ、何れも知名の新興學徒、必ずしも歷史專攻者でないにも拘はらず、從來充分明かにせられざる點に鋭利な分析のメスを振ひ得てゐるが、このことは、所謂歷史時代研究者なる歷史家必ずしも明治、大正、昭和時代研究の第一人者たらざるを思はしめる。

今後六回に亙る諸分册に、講師諸氏が公平な立場に立つて歷史的事實を批判し、將來を指導するの責を全うし、併せて從來の諸研究の缺を十二分に補正せられんことを冀ふ。會費　一册一・〇〇　七册七・〇〇　申込金なし、東京岩波書店(吉田)

●繪卷物概說

福井利吉郎著

(岩波講座「日本文學」第十二回所收)

書肆岩波がその計畫になる幾つかの講座の一つとして「日本文學」を刊行し始めたのは昨年六月のことである。爾來今日まで配本十二回、既に豫定回數の半を越し總頁數は凡て五千の多きに達してゐる。この講座はもと極めて多くの事項に亙り廣く諸方面の執筆者を集めてゐるので、個々項目を異にする每にその色彩の違ふものがあるが、なほそれらの上に全般的に一つの傾向の目立つて認められるものがあるとすれば、それはそれらがいづれもひところこの方面の研究にドミナントであつたところの輕浮な印象批評的態度を棄てゝ一樣に著しくその資料に即して着實に考察を加へようとしてゐることではなからうか。それは必ずしも徒に二三の新資料の發見やいはゞ無目的なテキストの校訂などのことのみを言ふのではなくして專ら廣き流布によつて常識化された通說の、根本資料に基く嚴密な再吟味である。そのことの爲にはもとより一般の自由なる利用に委ねられる樣になつた資料の豐富とそれにもまして學界に於ける若き新しい